

永劫回帰と瞬間

——「ツアラツストラかく語りき」の思想をめぐって——

平井邦男

1

当世風に言うならば、いま何故ニーチェなのか？ と問うことも出来るだろう。一世紀以上前のニーチェの著作が、いまなお、何故読み返さなければならないのか？ と。

ニーチェの著作が出版された時、誰も読む人間はいなかった。だが、いま多くの若者は、ニーチェを何度となく読み返している。何故なのか？ 我々が、彼の言葉を理解出来るほどに成熟したのか？ それとも、世界が彼の予言した方向に動いたと言うのであろうか？…… そもそも、ニーチェの魅力は一体どこにあるのだろうか？

恐らく、若者がニーチェにひきつけられる理由の一つは、彼の文章の持つ魔力にあるに違いない。彼の文章がもつリズム、テンポ、拍子、旋律、突然の変調、謎めいた言葉と気配、——こういった彼の文章のかもしれない霧囲気の中に若者は何かをかき取るのだ。

ニーチェは、思想もまた芸術であるということ、思想もまたドラマであり、音楽であると言うことを、我々に教えてくれた稀有な文章家である。恐らく、彼のこの文体的な魅力がなければ、彼の思想もとくに死に絶えていたであろう。

思うに、あらゆる思想は常に、それにふさわしい表現形態をもっている。いや、そう言うだけでは足りない。思想とは、本質的にスタイルなのである。それは、適切な表現形式と文体を得てはじめて、人々を動かし、啓発し、衝撃を与える。そうでなければ、およそ思想としての価値

を持ち得ない。思想においては、その内容とスタイルは決して切り離すことが出来ないものなのである。

そして、思想家とは、自己の考えや観念に、最も適切なスタイルを与え得る者でなければならぬ。というより、思想家とは、一つのスタイルの創造者でなければならぬ。何故ならば、スタイルは、思想そのものなのだから。スタイルを創造することが、即ち、思想を創造することなのだから。この事を理解しなければ、ニーチェのいま読み返される理由が理解出来ないであろう。ニーチェ自身は次のように言っている。

《およそ書かれたものの中で、わたしは、人が血をもって書くものだけを愛する。血をもって書け。そうすれば、血が精神であることを知るだろう。》^①

《血と警句をもって書く人は、読まれるのでなく、暗記されることを欲する。》^②

恐らく、ニーチェの読者は、彼の文章の中にニーチェの切実な体験をかき取るのであろう。彼の語る一語一語が、血でもって書かれていることを感ずるのであろう。それが、ニーチェの魅力の源泉である。彼は、常に本音で語っている。我々は、ニーチェの語り口から、それを直観的に感じとるのである。誠実(Wahrhaftigkeit)或いは正直(Ehrlichkeit)、この言葉は、ニーチェの魅力の中心部分にある。彼ほど見せかけや、偽善からほど遠い人物はいまい。また彼ほど、世の偽善を鋭く見抜き、その実体を暴露した人物も少ないであろう。本物が少なく、偽物が横行する現代にあって、我々はニーチェの痛切な言葉に、清涼剤のようなすがすがしさを感ずるのではなからうか？ それも、いまなお、ニーチェが読み返されている理由ではないだろうか？

ところで、ニーチェの著作の中でも、「ツアラッストラかく語りき」は最も特異な位置を占めているだろう。そこには、ニーチェの後期の最も重要な思想が——神の死、力への意志、超人、ニヒリズム、永劫回帰、運命愛、e t c、——すべて展開されている。これは、ニーチェの他の作品には見られない稀有なことであろう。とりわけ、永劫回帰の思想は、この「ツアラッストラかく語りき」以外では、ほとんど述べられていない。彼自身次のように述べている。

《——わたしの著作のなかで独自の位置をしめるのは、わが「ツアラッストラ」である。わたしはこの本で、これまで人類に贈られた最大の贈物をした。》^③

ニーチェは、この「ツアラッストラ」のもっている《のどかな調子》^④に注意をうながしている。

《ここで語っているのは狂言家ではない。ここでなされているのは「説教」ではない。ここで求められているのは信仰ではない。はてしもない光の充実と幸福の深みから、一滴また一滴、一語また一語と落ちてくるのだ、——やさしいゆるやかさが、この話のテンポである。こういうものは、ほんとうに選りぬきの人たちだけにとどく。ここで聞き手になれることは、無類の特権だ。ツアラツストラを聞く耳を持つことは、だれにでも勝手にできることではない、……》⁽⁵⁾

「ツアラツストラかく語りき」は一つ一つの章が、論説でありながら、詩的な文体をもち、なおかつ、全体が、劇的に構成されているという特異なスタイルを持っている。このスタイルをもつことによって、作者であるニーチェの姿は、背後に消えてしまい、架空の人物であるツアラツストラ像によって、個々の論説に統一性を与えることが出来たのである。

ツアラツストラと言う人間のイメージ、彼の遍歴と、彼の語る詩的な教説——こういった構図とその詩的な文体が「ツアラツストラかく語りき」の生命なのである。ニーチェは、このスタイルを得ることで、自己の思想に統一性をもたせることが出来たといえるだろう。とりわけ、ここで展開されているような永劫回帰の思想は、恐らくは、このような詩的な歌い上げの形式をとらない限り、それは思想としての力を十分發揮することが出来なかつたであろう。彼はこの思想を思いついて以来、いや、この思想に襲われて以来、十八ヶ月の間、それを自己の中に、暖めていた。ニーチェは、その間に、この思想を表現するにふさわしい形式を探していたのである。そして彼は、それをツアラツストラという人物と、その詩的な教説という形で表現出来ることに気付いたのである。

「ツアラツストラ」は、或る意味で、聖書の中の山上の垂訓のパロディ、或いはデフォルメと見えるであろう。それこそニーチェの意図するところであったのだ。また、それは、ヴァーグナーの「パルジファル」に対抗するものとも考えられるであろう。それもまた、ニーチェの意図するところであったのだ。いずれにせよ、ニーチェはこのスタイルを思い付くことで、「ツアラツストラかく語りき」を書くことが出来た。そして、そのことによって、彼は、それまでアフォーリズムの形で発表していた彼の全ての作品に統一性を与え、まとまりのあるものとすることが出来たのである。

我々は、以下に、ニーチェの思想を考察する訳だが、その際、「ツアラツストラかく語りき」を中心に分析を進めることにしよう。そして、彼のその他のすべての作品をこの「ツアラツストラかく語りき」の注釈として用いることにしたいと思う。恐らく、それは、ニーチェ自身も望

んでいたことであろう。

2

ところで、ニーチェは、この「ツアラッストラかく語りき」に表現されているような後期思想を、最初から持っていたわけではない。ここに示されている考えに到達するには、彼は、人生の最大の危機を乗り越えなければならなかった。順風満帆で過して来た青年時代の終わりに、彼は、それまで彼が全身全霊でもって愛していた一切の物に言いようのない嫌悪感と吐き気を覚えるのである。病気となり、孤独となり、バーゼル大学の教授職を辞職し、独りあてのない漂泊の旅に出る。そこで彼は、それまで抱いていた観念に徹底的な批判を加えるのである。そうして、彼は生まれ変わるのである。彼は、この精神的な変化について次のように書いている。

《わたしは君たちに精神の三つの変化をあげる。つまり精神がラクダになり、ラクダがシンになり、シンが最後に子供となる変化を》^①

これは、ニーチェの「精神現象学」である。このラクダ、シン、子供という移り行きに、ニーチェの思想の展開が示されている。

ニーチェの生涯は、如何にして人は本来的自己になり得るか、ということの実例を示しているだろう。即ち、彼の一生は、次第に本来的自己に目覚めていく過程を示している。

ラクダの時代とは、黙々として、従順に、与えられた重荷を背負う状態であろう。誰でも、最初は既存の文化を学習して身につけることから始める。ニーチェは、そのようにして、リッチュル教授の下で、文献学者となった。二四才でバーゼル大学の教授であった。正に、順風満帆の出だしであった。

彼の初期思想は、ショウペンハウワー哲学と、ヴァーグナー芸術とに密接に結びついていた。実際、処女作「悲劇の誕生」はヴァーグナーに捧げられており、第二の著書「反時代的考察」には、「教育者としてのショウペンハウワー」と「バイロイトにおけるリヒアルト・ヴァーグナー」の二論文が含まれている。彼の青春時代は、この二人に捧げられたといっても過言ではない。これが、ニーチェの所謂「ラクダ」の時期である。

しかし、このラクダは、突然、シシに変身する。シシの時代は、自己否定の時代、反抗の時だろう。この間に、彼は、それまで身につけたすべてのものに徹底的な批判を加え、吟味し、点検し、自己にあわないものをふり捨てて、自己本来の姿に気付くのである。

幻滅は突然やって来た。一八七六年八月、バイロイト祝祭劇場の第一回の公演の始まる時であった。彼は突然の疎外感と吐き気に襲われたのである。それは、こういう状態であった。

《まるで夢でも見ているような気持だった。……いったいどこにわたしはいるのか？ 何ひとつ見覚えがなかった。ヴァーグナーにさえ見覚えがなかった。わたしはむなしく思い出のページをくった。トリープシェン——はるかな幸福者の島、まるで似通う影もない。礎石を置いたころのあの比類のない日々、それを共に祝った小人数のしっくりした仲間。彼等には、繊細な物事にふれる指をことさら注文するまでもなかったものだ。いまはそれにまるで似通う影もない。何事が起こったのか？》^②

その場にいたたまれなくなったニーチェは、一人祝祭劇場を離れ、ボヘミヤの森の奥深くに逃れる。ここで、彼は、彼を取りまいていた、ありとあらゆるものに対して、吐き気を感じ、世界を、人々を、また自己自身を呪うのである。そして、彼は、はじめて自己の陥入った危機の原因に気づくのである。彼は書いている。

《当時わたしにおいて決定されたのは、ヴァーグナーとの決裂というようなものではなかった。——わたしは自分の本能の全般的混迷を感じたのだ。ヴァーグナーにせよ、バーゼルの教授職にせよ、個々の失策は、単にその徴候にすぎなかった。わたし自身にがまんがならぬという気持がわたしを襲った。いまこそわたし自身に立ち帰って思いをひそめなければならぬぎりぎりの時だと見てとったのだ。》^③

彼は、ここで、生命の危機とも言える、ひどい病気になるのである。

《——まだ生きてはいたが、三步先は見えなかったのである。当時——それは一八七九年だった——わたしはバーゼルの教授職を捨て、サン・モリーッツで一夏過した時には影同然だったが、その年の冬、わが生涯のもっとも暗い冬をナウムブルクでおくった時は、影だけになっ

てしまった。これがわたしの最小限だった。》^④

この病氣と孤独の時に、彼は、いままで身につけていた観念のうちで、自分にあわないものをそれぞれふり落していったのである。これが、ニーチェの所謂「シシ」の時代である。「人間的なあまりに人間的な」、「さまざま意見と箴言」、「漂泊者とその影」がそれらの時期にあ

たるだろう。

ここで、一体どのような自己吟味がなされたのか？ ニーチェにとって、病気の状態とは、何であったのか？ 恐らく、それは、人間の卑小きに対する嘔吐、自己の運命に対する呪い、世界に対する怒り、それらが入り混じった何とも言えない嫌悪感であっただろう。

とりわけ、彼はヴァーグナーへの幻滅に、今まで生きる糧としてきた地盤の崩壊を感じたことであろう。彼の実存的な危機である。ここで、彼は、最も辛いことを行わなければならない。即ち、いままで抱いていた観念のすべてを疑い、吟味し、批判することである。これまで最も愛していたものを否定し、拒否することである。彼は書いている。

《認識の人は、その敵を愛するばかりでなく、その友をも憎みえなければならない》^⑤

この言葉の中に、ニーチェのどれほどの無念さがこめられていることか！ 彼は、断腸の思いで、自己の最愛のものをふり捨て、自己の青春を葬ったのである。そして、彼は、今までの考えを吟味するために、芸術、道徳、宗教、国家、文化、人間関係、……などのテーマについて、おびただしい数の心理的分析を行う。むしろ、それらを行わざるを得なかったのだ。そうすることによってしか、彼は、自分の怒りや呪いや吐き気から逃れることが出来なかったのである。とりわけ、彼は、ショウペンハウワーから受け継いだ様々な観念を批判する。彼は次のように書いている。

《誤謬がつぎつぎに静かに氷の上に置かれる。理想は反撃されるのではない。——凍えるのだ……。ここでは、たとえば「天才」が凍える。

少しさきでは「聖者」が凍える。厚い氷柱の下で「英雄」が凍える。おしまいに「信仰」が、いわゆる「信念」が凍える。「同情」もひどく冷却する。——ほとんどいたるところで「物自体」が凍える。……》^⑥

そして、こうして出来あがった、多くのアフォリズムによって、彼は次第次第に、病気の真の原因に気づくのである。彼はそれを「自己喪失」(Selbstlosigkeit)と呼んでいる。自分で自分を取りちがえていること、習慣や世論によって生活し、それを自分だと錯覚している状態、他人の意見を自分の意見だと思い込んでいる状態——結局、彼はこのことに耐えられなかったのである。彼の内にある、本来的な自己が、そのような自動人形の状態に、大きく否を言ったのである。彼は書いている。

《当時わたしの本能は、これ以上譲歩し、調子を合わせ、自分で自分を取りちがえていることに、断然反対の決定をくだした。どんな種類の

生活でも、どんな都合の悪い条件でも、病気で貧困でも——例のくだらない「自己喪失」よりか、すべてわたしにはましに思われた。その自己喪失には、わたしは最初は無知から、若さからそこにおちいったのだったし、後には惰性から、いわゆる「義務感」から、いつまでもそこに引っかかっていたのだ。^⑦

病気と孤独の日々が——最も苦しく、つらい日々が、この自己喪失から「自分への復帰」をもたらしたのである。彼は、ここで、本来的自己を手にしたのである。即ち、ヴァーグナー芸術とショウペンハウワー哲学から、自己を解放し、自分自身の足で大地をしっかりとふみしめたのである。ペシミズムの哲学を捨て、彼自身の本来的な哲学をつくりあげたのである。病気から回復し、行く手に、わずかばかりの光明を見いだし、ようやく本来の自己を取りもどしつつある時の著作が、「曙光」であり、「悦ばしき知識」である。これらもすべて、この「シシ」の時期に入るであろう。「ツアラツストラかく語りき」は、この「シシ」の時代を通過してはじめて可能となったのである。

ニーチェは、病気と孤独の日々を通して、ペシミズムの哲学から脱却した。彼は、結局、ショウペンハウワーとヴァーグナーをデカダンスだと判断したのである。それは、彼にとって目の覚めるような洞察であった。生きようとする意志を否定するペシミズムの哲学は、衰弱し、疲労した人間の休息を求めようとする哲学である。そして、ヴァーグナーの音楽は、これらデカダンス達に、阿片のような効果を与える音楽である。即ち、それは、疲労し、苦悩する人間に、一時的な陶醉とケイレンを与える麻酔的芸術なのである。ニーチェは、自己の生命の最小限の状態で、これらの哲学と芸術に断固として否を言ったのである。これは、ニーチェの最大の体験である。言ってみれば、それは、ニーチェの実存的体験と言ってもよいであろう。彼は、この体験によって、本来的自己に目覚めた。そして彼は、彼本来の思想に到達したのである。

子供の時代とは、この自己否定の時代を通過して、また新たに無邪気になった状態のことである。ニーチェが実際にそのような状態に達したかどうかは分らないが、彼がそのように状態を理想としていたことは事実である。彼は書いている。

《子供は無邪気であり、忘却であり、新しいはじまりであり、遊戯であり、みずから回転する車輪であり、第一の運動であり、神聖な肯定である。》

そうだ、創造の遊戯には、兄弟よ、神聖な肯定を必要とする。精神はみずからの意志を意欲する。世界を失ったものは、みずからの世界を獲得する。^⑧

この子供のような無邪気さを獲得することこそ、ニーチェの後期思想の願望であろう。「ツアラツストラ」は、このような背景の下に書かれたのである。

3

「ツアラツストラかく語りき」は、ツアラツストラの「超人」の演説で始まっている。三十才で故郷を離れ、山に入ったツアラツストラは、十年経った或る日、人々に自分の悟った知恵を授けるために、山を下る。途中、森の中で隠遁生活を送る聖者に会い、会話をかわし、別れてから、町の市場に行く。そして、そこで最初の演説を行うのである。彼は、次のように話は始める。

《わたしはきみたちに超人を教える。人間は克服されるべきあるものである。人間を克服するために、きみたちは何をなしたか。》^①

これが、ツアラツストラの第一声である。この演説は民衆の耳には何も入らない。しかし、ツアラツストラはさらに「超人」について、語り続ける。

《さあ、わたしはきみたちに超人を教える！

超人は大地の意義である。きみたちの意志は「超人こそ大地の意義である」といえ！

わたしは切に願う、兄弟たちよ、常に大地に忠実であれ！ 超地上的希望を人々のいうことを信じるな！ 彼等は、それを自覚するといなどを問わず、毒を混ざるものである。

彼等こそ生命をけいべつするもの、死滅し行くもの、みずから毒されたものである、大地はこんな人間に飽きている。それゆえ、彼等を去らしめよ！》^②

ここで言っている「超地上的希望」とは「神」、「天国」、「彼岸」、「不死」、或いはそれに類した諸々の概念であろう。こう言う概念をもちだすのは、常に、デカダンであるとニーチェは言う。というのは、こういう概念は、現実の生命の価値を落しめるために考え出されたものであり、それは、もはや生きようという意欲を失った人々の作りあげた幻想だからである。

「超人」というのは、そういう「超地上的希望」ではなく、地上的な希望である。なるほど、「超人」という概念には、現実の人間に対する大いなる軽蔑の念が含まれてはいる。現実に存在するどの人間もあまりにも小さく、あまりにも卑小であるという苦い認識が、《人間は克服されるべきあるもの》という観念に導いたのであろう。しかし、「超人」というのは、あくまで地上的な概念なのである。それは、例えば「神」という概念とはまったく異なる。ツアラツストラは言っている。

《かつては、神をけがす罪は最大の罪であった。しかし、神は死んだ。それとともに罪を犯したものたちも死んだ。》^③

即ち、超人という概念は、神の死を前提にしているのである。神など存在しない。神という概念は、生命を中傷するものだ——そうニーチェは、主張するのである。これらの主張は、その発せられた時代背景や、ニーチェの生い立ちを考えれば、如何に驚異的なものであるかが理解できらるだろう。

周知のように、ニーチェは、ルター派の教会の牧師の長男として生を受け、キリスト教的雰囲気のも最も濃密な場所で、幼年期を送っている。そのニーチェが、神を否定しているのである。そのような言葉が、黙って見逃されるような時代ではなかった筈である。これらのことを考えると、この神の死の宣言には、ニーチェの並々ならぬ決意が感じられるであろう。

ところで、ニーチェは、何故神を否定しなければならなかったのか？ 神の死については、既に、「悦ばしき知識」の二二五節に、神を殺害した狂気の男の逸話がのせられている。白昼に提燈をつけながら、神を探している男、——この狂気の人間は、次のように語る。

《おれがお前たちに言ってる！ おれたちが神を殺したのだ——お前たちとおれがだ！ おれたちはみな神の殺害者なのだ！》^④

恐らく、神の死という事柄は、こう言う形でしか、表現することが出来なかつたであろう。しかし、この神の死という事実は、聴衆の誰にも理解されない。この狂気の男は次のように述べる。

《まだ、おれの来るべき時ではなかつた。この怖るべき出来事はなおまだ中途にぐずついている——それはまだ人間どもの耳には達していないのだ。雷光と雷鳴には時が要る、星の光も時を要す、所業としてそれがなされた後でさえ人に見られ聞かれるまでには時を要する。この所業は、人間どもにとって、極遠の星よりもさらに遙かに遠いものだ——にもかかわらず彼らはこの所業をやってしまったのだ！》^⑤

さて、神の死については、このような狂言じみた方法でしか表現出来なかつたが、人間が何故神を殺害しなければならなかつたかについて

は、「悦ばしき知識」の序言の中で次のように表現している。

『神様がどこでも御覧になっていらっしやるって、本当なの?』と幼い少女がたずねた、——「でもわたし、そんなのひどいと思うわ」——哲学者にとつての警告だ! 自然が謎や種々さまざまな不確実性の背後に身を隠して、その羞らいを、もっとわれわれは尊重すべきだ。おそらく真理とは、それ自身の曰く因縁のかずかずをわからせないようにする訳のある女なのだろうか? ひょっとしたら彼女の名は、ギリシャ語で呼んで Baubo というのだろうか? ……おお、このギリシャ人! 彼らは、生きるすべをよくわきまえていた。そのためには、思いきって表面に、シワに、皮膚に、踏みとどまること、仮象を崇めること、形式や音調や言葉を仮象のオリュンポス全山を信仰することが必要だったのだ! このギリシャ人らは表面的であつた——深さからして!』^⑥

ここで言われていることは、晴れやかに生きていくためには、我々はあまり様々なことを掘り返さずに、表面にとどまっているほうがよいということである。ところが、神が存在するとすれば、そういうことが出来なくなってしまう。というのは、この少女の言うように、神なる存在がいて、それが、我々の行動の全てを見ているとすると、この神の存在は、我々を羞いらせるからである。それは、我々の生存から、晴れやかさを奪ってしまう。我々、人間は、そのあらゆる行為が誰かにずっと見られているということに耐えられないのだ。だから少女は「そんなのひどいと思うわ」と言ったのである。

我々は、いつも誰かから監視されていると考えると、もうそれだけで無邪気に生きていけなくなる。神は、愚かな人間の行動を見て、我々に同情するのも知れない。しかし、この同情は厚かましい。それは、我々の羞恥心に反する。我々は誰からも同情などされたくはない。「ツアラストラ」第四部の「もっとも醜い人間」は、次のように語る。

『彼の同情は羞恥を知らなかった。彼はわたしの最もきたない隅にまでもぐりこんだ。このもっとも好奇心の強い者、あまりにも押しつけがましい者、あまりにも同情に富める者は死ねばならなかった。』

彼はわたしを常に見ていた。このような目撃者にわたしは復讐をたくらんだ——でなければ、自分が生きていく気がしなくなったのだ。一切を、したがって人間をも見た神、この神は死ななければならなかった! このような目撃者が生きていることに、人間は耐え得ないのだ。』^⑦

即ち、この神を殺したもつとも醜い男は、彼の羞恥心から、神を殺したのである。《同情は羞恥に反する》⁽⁸⁾。同情することは、人を羞入らせることである。誇りを持って生きる人間は、他者から同情されることを最も嫌う。同情なんて厚かましい。無用な同情をやめよ！ この同情をめぐって、ニーチェのキリスト教道徳に対する批判が展開されるのである。

4

ニーチェは、周知のように、同情の克服を彼の最も重要な道徳的課題としていた。西洋文明の中核をなすキリスト教の道徳は、同情を、隣人愛を、人間の最も主要な徳として奨励する。ショウベンハウワーも、同情（同苦）と禁欲を聖者に至る道としてすすめる。しかし、後期のニーチェは、この同情を克服する事を自己の最重要課題と考えるのである。何故か？

ニーチェによれば、我々がまず第一にしなければならないのは、自分を愛し、自己を確立することである。しっかりと自分の足で立ち、自分の足で歩くことである。踊ることはなおさらよいであろう。

「わが兄弟たちよ、きみたちの胸を張れ、高く！ もっと高く！ そして脚のことも忘れるな！ きみたちの脚もあげる、きみたち、よい舞踏者よ。さらによいことは、きみたちが逆立ちもすることだ！」⁽⁹⁾

ところが、同情をその教義の中心にもつ宗教は、このように自己を確立することに後ろめたい気持をおこさせる。というのは、この世には多くの苦しんでいる人々があり、彼らをほっておいて自分のことだけを考えておればよいのか、という風に彼らは言うからである。苦悩する人に同情せよ、と。

しかし、同情することは、何であろうか？ 我々は、世の中の貧しい者、弱い者、苦悩する者に同情することで、世の中がよくなるのであるうか？ ニーチェは、この点について、世の常識とは別様に考える。

同情なんて厚かましい。同情は余計なおせっかいである。それは、人を最も傷つける。というのは、同情は、一見、人を助け起こすように見えながら、その実、人を軽蔑し、人の弱点を愛撫しながら支配する事だからである。ニーチェは、恐らくこの事を、病氣の間に悟ったにちがいない。

ない。病人には、医者と薬は必要である。しかし、所謂同情は必要ではない。いや、同情などという余計なおせっかいは病人にとって害悪である。それは、決して病気をよくすることはしない。それどころか、同情は、病気の悪くなることを望んでいる。何故ならば、病気がよくなれば、もはや同情することが出来ないからである。

同情する人は常に他者を必要としている。そして、他者を必要としている人間は、実は、自分自身に苦しんでいる。即ち、他者への同情の中には、自分自身に対する自己嫌悪が潜んでいるのだ。隣人愛の中には、自分に我慢がならないという気持が潜んでいる。自分自身に不満を持っているからこそ、人は他者のことが気にかかるのである。そして、他者の中の不幸を探し出すのだ。何のために？——同情するために、——即ち、支配するために、……。同情とは、弱い人間が、さらに自分より弱い者を求め、それを支配することである。それは、同情による支配によって自己嫌悪の感情から、逃れるためである。この同情をやめよ！そして、むしろ自分自身をもっと愛せ！ニーチェは、このことを繰り返し述べている。

《きみたちは自分に我慢できず、自分を十分に愛しない。そこできみたちは隣人を愛に誘惑し、隣人のあやまりをもって自分を金めつきしようとする。》^②

自分自身を愛するとは、所謂エゴイズムということではない。それは、ニーチェに言わすれば、自分を超人へ至る道として愛することである。それは、自己愛が同時に人類愛であり、また同時に超人への愛であるように、自分を愛することである。ニーチェは、この自己愛⇨人類愛⇨超人への愛を、同情や隣人愛に対抗するものとして立てる。これは、ニーチェの哲学の最も中心に位置する思想である。例えば、次のような詩を書いている。

《お前の運命の軌道をゆけ、

星よ、闇がお前に何のかかわりがある？

天福に安らいこの世の時代を超脱して去れ！

世の悲惨に縁なく遠くあれ！

お前の閃きは最も遠い世界にこそふさわしい、

同情はお前にとって罪悪であれ

お前に大事なただ一つの戒めはこれだ——清浄なれ！^③》

自分自身が、光り輝かなくて、どうして他者を救うことが出来るだろうか？ 我々は、まず自分自身を輝かせなければならぬ。そうして初めて、人々の慰めになることが出来るのである。苦悩する者は、いづれにせよ自分自身の力で克服しなければならない。我々に出来るのは、それとしておくことである。

ニーチェが同情を非難するのは、それが、人間のプライドをこの上なく傷つけるからである。同情は人間の羞恥心に反するからである。彼は、このようにいう。

《まことに、わたしは、同情によって幸福な、慈悲ぶかい人を好まない。彼等には恥じらいがあまりにもはなはだしく欠けている。

同情を持たねばならない時にも、わたしは同情を持つといわれることを欲しない。同情を持つ時にも、わたしは遠くはなれたところからそうしたい。^④》

《悩む者が悩んでいるのを見たことを、わたしは、彼等の恥じらいのゆえに恥じた。悩む者を助けた時、わたしは彼の誇りをひどくきずつけた。^⑤》

また、「悦ばしき知識」第三書の終わり、彼は同じことをもつと端的に述べている。

《英雄的にさせるのは何か？ ——自分の最高の苦悩と最高の希望とに向かって同時に突き進んでゆくことがそれだ。》（二六八）

《お前は何を信ずるか？ ——あらゆる事物の重さが新しく決定されねばならないということ、それを信ずる。》（二六九）

《お前の良心は何を告げるか？ ——「おまえは、おまえの在るところのものとなれ。》（二七〇）

《お前の最大の危険はどこにあるか？ ——同情のうちに。》（二七一）

《お前は他人の何を愛するか？ ——私の希望こそ。》（二七二）

《お前は誰を悪と呼ぶか？——いつもひとを辱しめようとするその者を。》(二七三)

《お前にとって最も人間的なことは何か？——誰も恥ずかしい思いにさせないこと。》(二七四)

《体得された自由の印は何か？——もはや自分自身に恥じないこと。》(二七五)

これらの言葉をよく吟味してみると、ニーチェが、人間にとって最も大切なものは、自分自身に対する誇りだと考えていたことがわかる。同情は、この最も大切な誇りを傷つける。ツアラツストラが、ワシとヘビを自分の動物として知っていることは、周知のことであろう。ワシは最も誇り高い動物として、そして、ヘビは最も知恵のある動物として、ツアラツストラにしたがっている。そして、「幻影と謎について」^⑥という有名な章で、ヘビに喉をつまらされた牧人に、ツアラツストラが、「かみつけ！ かみつけ！ 頭をかみきれ、かみつけ！」と叫ぶところを考えると、その中でも、最後に残るのは、誇りであるということが分かるであろう。

たしかに、この世には、様々な悩みがあり、我々の同情をひく事柄にみちている。だから、ツアラツストラは、常に与える者なのである。彼は、いつも自分をおしげもなく与える。しかし、それは、いわゆる同情ではない。彼は、与える時も、次のように言う。

《しかし、わたしは、与える者である。わたしは友として友だちに喜んで与える。よその人や貧しい人たちは自分でわたしの木から実を摘みとるがいい。そうすれば、ひとを恥させることがすくない。》^⑦

我々は、同情によって他人の傷口を広げるようなことをしてはならない。それは他人を恥じ入らせ、彼の誇りをひどく傷つける。それこそ最も残酷なことである。それよりも、人に新たなものに挑戦することを教え、自分自身を笑い飛ばすことを教えなければならぬ。

《種が高等であればあるほど、うまくことがはこぶことは稀になる。きみたち、より高い人間よ、きみたちはみな——出来そこないの人間ではないか？

元気を落すな、そんなことが何だ！ まだまだ可能なことがたくさんあるではないか！ 世人が笑わずにはいられないと同様、きみたちはきみたち自身を笑いとばすことを学べ！

きみたち、半ば破滅せる者らよ、きみたちが出来そこないで半分しか上出来とはいえないからとて、なんの不思議があらう！ きみたちのうちには——人間の未来が押しよせ、衝突しているではないか？

人間のもっとも遙かなもの・もっとも深いもの・星のように高いもの・その巨大な力——これらがすべてたがいにきみたちの壺の中で泡立っているではないか？

多くの壺が割れたって、なんの不思議があるう！ 世人が笑わざるをえないと同様、きみたちはきみたち自身を笑いとぼすことを学べ！ きみたち、より高い人間よ、まだまだ可能なことがどんなにたくさんあることか！

そして実際、どんなにたくさんの方がすでにうまく出来たことか！ この地上は、小さな良い完全な事物に、上出来なものに、どんなに富んでいることだろう！

小さな完全な事物を、きみたちのまわりに置き、きみたち、より高い人間よ！ その黄金の成熟は心をいやす。完全なものは希望することを教えるのだ。⑧

世の中には、色々な事物がある。美しいものもあれば、醜いものもある。ニーチェは、その中の良いもの、上出来のものに目を止めるべきだ、と言う。そうして、それによって未来への希望を持つように主張するのだ。

これに反して、この世の泥沼をたえず見つけようとする人がいる。彼等は、美しいもの、良いもの、素晴らしいものには目もくれない。常に、醜いもの、悲惨なもの、惨めなものを捜し出す。そして、それらに同情するのである。これらから離れてあれ！ 《清浄なれ！》⑨

ニーチェは、「悦ばしき知識」第四書の冒頭の「新しい年にのぞんで」という文章で次のように書いている。

《私は、いよいよもって、事物における必然的なものを美と見ることを、学ぼうと思う、——こうして私は、事物を美しくする者たちの一人となるであろう。運命愛(Amor fati)、——これが今よりの私の愛であれかし！ 私は醜いものに対し戦いをしかけようなどとは思わない。私は非難しようとも思わぬし、非難者をすら非難しようとは思わない。眼をそむけること、それが私の唯一の否認であれかし！そして、これを要するには、私はいつかきつとただひたむきな一個の肯定者であろうと願うのだ！》(二七六)

この同情の克服は結局、ニーチェの哲学の窮極の結論、「運命愛」に導く。しかし、この点については、後に詳しく語ろう。

さて、話を元にもどそう。ツアラツストラは、「超人」についての演説をおこなうが、それは、我々人間が、現在の状態から脱皮するには未来の展望をもつことが必要だからである。「超人」とは、その未来の展望につけた仮の名にすぎない。《人間は克服されるべきあるものである》とツアラツストラは言うのは、我々は未来の展望を持って現状を克服しなければならない、ということである。勿論、この背後には、ニーチェの生命に対する考え方が存在する。

さて、ニーチェに言わずれば、人間の本体は、精神でも理性でもなく、身体である。我々の肉体である。彼は次のように言う。

《きみの思想と感情の背後に、兄弟よ、強力な命令者、知られざる賢者が立っている。——それは本体と称する。それはきみの肉体に宿っている。きみの肉体がそれである。》^①

このニーチェの《肉体》概念は、フロイトの無意識的本体《イド》に似ているが、この本体である肉体は、どのような存在なのであろうか？それは、一体何を欲しているのか？

この問いに対してニーチェは、はっきりと次のように答えている、——即ち、肉体は、《自己を越えて創造すること》^②を欲している、と。それは、現状よりも一歩でも向上すること、より大きくなり、より柔軟になり、より強力になり、より美しくなることを願っている。それが、生命の本質なのである。それが生ある運動体の傾向なのである。

即ち、生命とは、より大きくなるうとする傾向をもった運動体である。ニーチェ流に言えば、生とは「力への意志」なのである。彼は言っている。

《生あるものを見いだしたところに、わたしは力への意志を見いだした。奉仕する者の意志の中にも、支配者になろうとする意志を見いだした。》^③

《生命のあるところにだけ、意志もある。だが、それは生命への意志ではなく——わたしはきみにこう教える——力への意志である。》^④

ニーチェは、彼の実存的危機の中で、生命の本質が何であるかを体得したのである。即ち、生の本質を、自己を越えて創造しようとする「力への意志」だと確認したのである。「超人」という観念も、この力への意志という観点からでている。同じ「意志」という言葉を使っても、ショウペンハウワーの「生きようとする盲目的意志」と、ニーチェの「力への意志」とは、正反対の概念である。ショウペンハウワーの場合は、その意志は、丁度仏教でいう業という概念と同じように、我々に苦痛と悲惨をもたらすものであり、我々は、それを否定し、そこからの脱却を計るべきものであった。

これに対して、ニーチェの「力への意志」は、それと正反対である。意志というのは、生命体のもつ傾向のことであるが、それは、自己を越え、より大きく、より強く、より美しい生命を作り出すことを目指している。この意志を肯定して、その目指すところのものに名前を与えて、それをはっきりとした目標にしななければならない。それが、「超人」と言う言葉の由来である。

この意志を中傷し、非難するのは、デカダンスのしるしである。彼等は結局、生きることを拒否しているのである。即ち、生きることに疲れ、思っている。だから、彼等は発刺として生きることを中傷し、そのかわりに生命を弱めるような徳を讃美する。曰く隣人愛、曰く同情、曰く思いやり、曰く優しさ、曰く無私、……。これらあらゆる宗教が掲げる徳目は、ニーチェにいわすれば、生命を否定している。それは、生命を弱め、暗れやかに生きることと毒を混ぜ、後ろめたさを与える。ニーチェは、自己の生命の最低の状態に陥ってはじめて、これらの概念の誤謬に気づいたのである。

周知のように、ニーチェは、初期思想において、ショウペンハウワー流の「天才」や「聖者」を人類の目標としていた。「超人」という概念は、この「天才」や「聖者」の止揚されたものと容易に察せられよう。この止揚の中に、ニーチェの本来的な哲学があり、ニーチェの思想の大転換がある。

即ち、ニーチェは、ここで意志否定のペシミズム哲学から、意志肯定の生命の哲学に転換したのである。我々人類の目標は、ショウペンハウワーの言うように、生きようとする意志を否定して、「冥想」、「同情」、「無私」、「禁欲」などによって達せられる「天才」や「聖者」ではない。そうではなくて、生命本来の傾向を肯定して、それを達成する方向に向かうべきである。——「超人」への道を目指すことである。

この「超人」と言う言葉の中には、ニーチェの全ての人間に対する嫌悪感が潜んでいる。人間の中の最高のものでも、まだまだ卑小である。

その真実の姿を見れば、そこには、何か吐き気を催すようなものがある。だから、我々の目標は、そのような現実の人間ではなく、それらの人間を越え出た存在、未だ存在したことはない未知なる存在、我々の全ての可能性を開花させ、我々の生きる目標となるような理想的な存在——「超人」——そういうものでなければならない。

デカダンスというのは、生命の基本的条件である闘いや競争を否定する。それが求めているのは、闘いや競争などが全くなく、平和で、何もしなくても楽しく調和のとれた状態——即ち、ニルヴァーナである。つまり、胎児が母体内にいる時のような状態を求めているのである。しかし、このニルヴァーナ願望、——母体内復帰の願望は、フロイトの言を待たずともなく、死への願望である。

ニーチェは、あらゆる宗教、道徳が、この生命の否定、——死への願望であることを見抜いた。ショウペンハウワーの哲学もヴァーグナーの芸術もともにデカダンスである。それらは、疲れはてた人々にとって、麻酔的な一時しのぎの気休めを与えるだけに過ぎない。しかし、結局は人々を損ない、弱め、衰弱させてしまうのである。ニーチェは言う。

《悪人がどんな害悪をなそうとも、善人の害悪こそもっとも有害な害悪なのだ。》

そして、世界を中傷する者どもがどんな害悪をなそうとも、善人の害悪こそもっとも有害な害悪なのだ。》^⑤

闘いや競争を否定し、隣人愛や同情を常に口にする「善人」は、生命の最大の中傷者である。彼等は、道徳という武器を用いて、生命を中傷する。ニーチェは、それこそもっとも有害であるという。

ニーチェは、隣人愛に対して友情を主張する。彼は次のようにいう。

《隣人ではなく、友をわたしはきみたちに教える。友こそきみたちにとって大地の祝祭であれ、超人の子感であれ。》^⑥

即ち、友情とは、自己を光り輝やかせる者達が、進む方向違っていても、互いにお互いを同志と認めあうことである。彼の所謂「星の友情」である。それは、互いに切磋琢磨しながら、互いの力を高め合うものである。いわゆる同情や隣人愛のようなものではない。そうでなくて、それは、違う道を辿って同じ「超人」を目指すものである。ニーチェは、同情のようなしめった愛のかわりに、この同志愛である友情を主張するのである。

なにはともあれ、生命を否定してはならない。生きていくかぎり、我々は、生命本来が持っている傾向を肯定して、超人への道に進まなければ

ばならない。ニーチェの後期思想は、彼が、自己の実存を賭けて手にした、生命の哲学——力への意志の哲学——超人への哲学であった、と言えるだろう。これらのことを理解出来ないうちは、恐らく、ニーチェを理解したことにはならないだろう。

6

ところが、この超人への道という構想に最大の障害が現われる。それは、永劫回帰の思想である。同じことが何度も何度も繰り返し回帰するという考えである。この永劫回帰という考えは、ニヒリズムの最も極端な形式であろう。

同じ事が何度も何度も繰り返され、回帰する。我々は、自己の進歩を願い、自己の向上を目指して行動しても、それはむなし。というのは、同じ状態が何度も繰り返して戻ってくるのだから、そこには進歩も向上も存在しないからである。ただ、いま直面している「瞬間」が、永遠のものとして回帰してくるだけである。

ツアラッストラは、最初、永劫回帰の思想に思い至った時、身震いを感じた。彼は、永劫回帰の思想に、吐き気を感じたのである。

《ああ、ああ！——吐き気、吐き気、吐き気——わたしは悲しい！》

同じ事態が、何度も繰り返して回帰してくることなど、とても耐えられないことだと思った。

《一切は行き、一切はもどってくる。存在の車輪は永遠に回転する。一切は死んで、一切はふたたび花を咲かせる。存在の年は永遠にめぐる。》

一切は破れ、一切はつきあわされる。存在の同じ家が永遠にたてられる。一切は別れ、一切はふたたび挨拶する。存在の輪は、永遠にこのれに忠実である。

あらゆる刹那に存在ははじまり、すべての『ここ』のまわりに、『かしこ』の球が回転する。中心はいたるところにある。永遠の歩む道はまがっている。

そういうことになれば、あのあきあきした小さい人間が、また戻ってくる。彼等は決して亡びることはない。彼等は、永久に戻ってくる。そ

して、我々が願っている進歩や向上はあり得ないことになるのだ。

《——「ああ、人間が永遠にもどってくる！ 小さい人間が永遠にもどってくる！」——

かってわたしは二人を共に裸で見たことがある、もっとも大きい人間ともっとも小さい人間の二人だ。二人はあまりにも似かよっていた——もっとも大きい人間でもまだあまりにも人間的であるのをわたしは見た！

もっとも大きい人間でもあまりにも小さいこと！——これが人間に対するわたしの嫌悪だった！ そしてもっとも小さい者もまた永遠に回帰するということ！——これが一切の存在に対するわたしの嫌悪だった！

ああ、吐き気！ 吐き気！ 吐き気！——そうツアラツストラは語り、ためいきをついて身ぶるいをした。自分の病気を思いだしたからである。》^③

現在の世界における人間の中の最高の者、その者でも、ニーチェに言わすれば、あまりにも、あまりにも小さい。その実体を知れば、顔をそむけ、吐き気をもよおすほどの卑小さである。——こう言いながら、ニーチェは、ヴァーグナーのことを考えていたのに違いない。我々には、それ以上の存在が許されていないのか？ これらすべての人間を越えるような存在、あの超人への夢はどうなるのか？

ツアラツストラは、この永劫回帰の思想に思い至った時、七日の間も、倒れて、吐き気に襲われていたのだ。ところが、その彼も、生命の極限状態を経て、ようやく病氣から回復するに至るのである。

《「もうそれ以上語るな、あなたは快方に向かっている！」——そうワシとヘビは彼に答えた。——「世界が花園のようにあなたを待っている、そこへ出て行け。

バラとミツバチとハトの群れのもとへ出て行け！ とりわけ、しかし、歌う鳥たちのところへ行け！ あなたが鳥たちから歌うことを学びとるために！

というのは、歌うことは快方に向かっている人々のためものだからだ。健康な者なら語るのもよからう。そして、健康な者が歌を欲しても、やはり快方に向かっている人とは別の歌を欲するのだ。》^④

このワシとヘビの忠告に対してツアラツストラは、次のように答える。

《——「おお、おまえたち、道化師よ、手回し風琴よ、たのおから黙ってくれ！」とツアラツストラは答えた。そして彼のワシとヘビについて微笑した。「おまえたちは何とよく知っていることか、わたしがこの七日間に、どんな慰めを自分みずからのために発明したかを！

わたしはふたたび歌わずにはいられない、——わたしが自分のために発明したのは、そういう慰め、この行き方の回復だったのだ。おまえたちはそれをまたすぐ手回し風琴の歌にしてしまうつもりなのか？》^⑤

永劫回帰という事態をどのようにして受け入れることが出来るのか？ このことについては何も言われていない。ただ、もう一度歌おうとすること、そういう行き方を選んだのだと言われるだけである。このことはどう解釈すればよいのか？ 恐らく、それは、永劫回帰の思想を肯定するのは、理性的な、論理的な問題ではないということを示しているのだろう。

ただ、彼は、理由はともあれ、もう一度、歌おうと思ったのである。もう一度、晴れやかに生きてみようと思ったのである。生きるのが厭であれば、黙ってこの世からおさらばすればよいのである。もし、それが厭なら、我々は楽しく、陽気に、晴れやかに生きようではないか！ そう彼は言うのである。

ニーチェが、このように言えるようになるためには、文字どおりの生存の危機を乗り越えて来たのである。彼の書簡を読む者は、そこに、ニーチェの生存への苦痛とうめき声を認めるであろう。彼は、何度も死の誘惑にさそわれそうになっている。生きるのが厭であるのなら、死ぬばいいのである。彼は、何度もそう思い、死のギリギリの近くまでいったであろう。しかし、彼は、結局思いとどまって、生きようと思ったのである。

《生きるとは何か？ ——生きる——とは、死のうとする何もかを絶えず自分から突きはなすこと、だ。》^⑥

そして、本当に生きていこうと決意したのであれば、我々は、生き生きと、楽しく、晴れやかに、生きていくべきではないのか？ それが、彼の主張なのである。

《わたしはふたたび歌わずにはいられない、——わたしが自分のために発明したのは、そういう慰め、この行き方の回復だったのだ。》^⑦

この現実の生に我慢がならないのであれば、我々は、死んでしまうより他に道はない。しかし、死ぬことが出来ず、或いは、死ぬのが厭であれば、我々はこの現実を肯定するより他はないのだ。こうして居直ると、我々には、現実が苦痛でなくなってくる。逃げようとするから、我々

は、それにとらわれるのだ。逃げようとせず、それを意欲すれば、我々はむしろ、自由を手にするのである。

《意欲は解放する。それが意志と自由についての真の教えである。——ツアラツストラはきみたちにこう教える。

もはや意欲せず、もはや評価せず、もはや創造せず！ ああ、この大きな疲れがわたしからいつも遠く離れているように！》^⑧

このように、ツアラツストラは語る。この《意欲は解放する》という言葉は、重要である。恐らく、それは、ニーチェ哲学の中核に存在する考え方であろう。

それがどんな事であれ、我々が、それを意志することによって、それは我々の自由な行為となり、喜びと感謝をもって肯定出来るものとなる。このことを、ニーチェは言いたのである。とりわけ、我々は、まず、何よりも自己自身を肯定しなければならぬ。つまり、自己自身の運命を自覚的に意志することが出来なければならない。

自己の運命とは、自分の過去であり、現在である。これを、我々はまず肯定しなければならない。しかし、我々は、過去のことをどうして意志することが出来るのか？ 現在、或いは、未来のことは、或る程度自分の意志が関係するのかも知れない。だが、過去のことは、もう過ぎ去ってしまったことだから、どうすることも出来ない。過去——即ち、我々の運命、それは如何ともしがたい。意志や意欲の入り込むことの出来ないものである。このような考えに対してニーチェは次のように言う。

《『意志は創造者だ』ときみたちに教えた時、わたしはきみたちをこのたわけた歌から離脱させた。

『こうあった』はすべて断片であり、なぞであり、恐ろしい偶然である。——だが、創造的意志はしまいとそれに対し、

『しかし、自分はそれを欲した！』という。

——しまいとそれに対し、創造的意志はいう。『しかし、自分はそれを欲する！ それを欲するだろう！』と。》^⑨

ここで言われていることは、過去を救済することは、我々の創造的意志にかかっている、ということである。即ち、我々の持つ未来のペースベクトイヴによるということである。ここに、ニーチェの遠近法主義が現われている。

過去を、それがどのようなものであろうと、「自分はそれを欲した！」と考えること。いや、そればかりではない。「自分はいま現在もそれを欲する！」と考えること。さらに、「自分は未来においてもそれを欲するであろう！」と考えること。つまり、過去を未来のものとして欲求す

永劫回帰と瞬間

おお、人間よ！ 気をつけよ！

二つ！

深い真夜中には何を語るか？

三つ！

「わたしは眠った、わたしは眠った——、

四つ！

深い夢からわたしはめざめた。——

五つ！

世界は深い、

六つ！

昼が思っているよりか深い。

七つ！

世界の嘆きは深い——、

八つ！

快樂は——心のなやみよりか深い。

九つ！

嘆きはいう、『ほろび行け！』と。

十！

しかしすべての快樂は永遠を欲する——、

十一！

——深い、深い永遠を欲する！」

十二！

②

瞬間というのは、ただちに消えてしまう。そして、また新しい瞬間が誕生する。この生まれてすぐ消えていく瞬間が永遠なのである。そして、瞬間が永遠に戻ってくるということは、その瞬間の中に、過去も、現在も、未来もすべて含まれているということである。つまり、我々が、その瞬間を意欲して生きるとは、その瞬間を生んだ過去をも意欲していることであり、その過去を未来においても意欲することなのだから、未来をも含んでいることになるだろう。即ち、瞬間が存在そのものになったのだ。この瞬間を生きることが、歌うこと、喜ぶこと、肯定することではなければならない。永劫回帰の思想とは、瞬間を存在として永遠に欲することを教える思想なのである。

さて、瞬間は瞬間としての価値を持っている。その価値は、決して他の瞬間に依存するものではなく、他のあらゆる瞬間から独立したその瞬間だけの価値である。我々は、直面するその瞬間を、その瞬間のために——その瞬間の快樂のために生きなければならない。それが、永劫回帰の思想の教えである。

即ち、瞬間は、それ自体のために存在している。それは、何か別の遠い目的のために存在するのではない。そうではなくて、この瞬間こそが目的なのである。この瞬間は、この瞬間のために存在するのだ。それは、決して何かの手段ではない。瞬間を他の何かの手段としてはならない。瞬間を手段としてではなく、目的として救い出すこと、——それこそ、永劫回帰を肯定することなのである。

瞬間を神聖なものとして扱うこと、——それが永劫回帰を肯定する思想である。ここで、我々は、精神の三つの変化の「子供」を思い出さなければならない。

子供は、いつも無邪気に遊んでいる。彼にとっては、瞬間は目的そのものである。この瞬間は何かのために存在するのではない。この瞬間はこの瞬間のために存在するのだ。彼は、瞬間とたわむれる。彼は、ただ、無邪気に遊んでいるだけである。それ以外に、瞬間は彼にとって意味をもたない。彼は、何事であれ、それを「やりたいからしている」のにすぎない。そして、彼にとっては、それ以外に人生の目的なるものは、存在しない。遊ぶこと、無邪気に世界とたわむれること、何も考えないで瞬間の中に没入すること、それこそが、彼にとっての生きる意味であ

る。ニーチェは次のように語っている。

《あらゆる物は永遠の泉において、善悪の彼岸にあつて洗礼される。善と悪とは中間の影、しめった悲哀、行く雲にすぎない。

まことに「万物の上に、偶然という空、純真という空、無目的という空、奔放という空がかかっている」と教える時、それは祝福することであつて、けがすことではない。

「無目的に」——これこそ世界のもっとも古い品位である。これをわたしはあらゆる物に取りかえしてやり、あらゆる物を、目的に支配された奴隷状態から救つてやった。③

人生に、はつきり決まつた目的など存在しない。——もし、あるとすれば、自己を無限に乗り越えること——絶えざる自己克服——即ち、超人への道を目指すことだけだろう。することは何であつてもよい。問題なのは、我々に与えられた瞬間を如何に過すか——如何に自己を燃焼させて瞬間を過すか——にかかっている。

何度もいうが、瞬間を重ねていけば、ゴールに達するのではない。そういうような考えは、瞬間を手段として扱っている。そうではなく、瞬間、瞬間がゴールであり、目的なのである。

我々は、純粹に物事そのものために、そのことを行うべきなのである。その事をやりたいから、行う。それが、瞬間を目的とする生き方である。その事のもたらす報酬や成功のために、その事を行うのではない。その事自体のもつ魅力、楽しさ、喜び、快楽、のたみに行動するのだ。ここに、ニーチェのいう遊び(Spiel)という概念がある。

ニーチェに言わすれば、人生は遊びである。《大地は神々のトバク台である》④。我々は、自己に気に入るやり方で、遊んでいるのだ。自分のやり方、即ち、趣味(Geschmack)こそ、我々の最も大切にならなければならないものである。彼は書いている。

《友よ、きみたちは、趣味について争うべきでない、というのか。だが、およそ生きること、趣味と賞味とのための闘いである！

趣味とは、同時に分銅であり、はかりざらであり、はかる人である。およそ生きとし生けるもので、分銅と、はかりざらと、はかる人をめぐる闘いをもたずに生きようと欲する者は、わざわざである！》⑤

人生は遊びである。が、それは、必然的に闘いをとまなう。自分の流儀、自分のやり方で生きようとするならば、どうしてもそこに何らかの

障害や抵抗に出会わざるを得ないからである。まず、第一に、社会的通念、道德の障害があるだろう。ニーチェは、道德こそ我々の生を重くする重圧であるという。この道德の重しから脱して、軽くなる必要がある。

ツアラッストラは、軽い人間である。彼は、笑いつつ真剣なことを語る。

「舞踏者ツアラッストラ、翼で合図をする軽い者ツアラッストラ、すべての鳥に合図しながら、飛ぶ身構えのできた、覚悟も用意もととのつた、至福にも軽々しい者。――」

「真実をいう予言者ツアラッストラ、真実に笑う者ツアラッストラ、短気者でも頑固者でもなく、跳躍と横跳びを愛する者、わたし自身がこの冠を自分の頭にかぶせたのだ！」^⑥

我々は、自分の趣味どおりの生き方をしようとするのなら、軽々と生きなければならない。世の重々しいことを笑いとばし、自分自身をも笑いとばす軽い者にならなければならない。世の所謂善や悪の観念など一体何であろうか？ 何が善であり、何が悪であるかは、本当のところ誰にも分かりはしない。善や悪の観念にとらわれずに、善悪の彼岸において、自己の趣味どおりの生き方をすること、――軽くなって、無邪気に遊ぶこと、――このことが歌うことなのである。即ち、永劫回帰を肯定することなのである。軽くなって、生きていることの素晴らしさを歌おうではないか！

8

さて、軽くなって自己の思い通りの生き方をするというのは、誤解してはならないが、決して努力をしないということではない。というのは、努力することは、人間の最大の喜びだからである。我々は、幾多の苦難や困難を乗り越えることで、喜びを感じるようになっていく。真の快楽は苦しさを乗り越えて初めて得られるものである。

遊ぶとは、自己の好みそのままに自由に行動することであるが、それは、決して安易に息抜きをするということではない。単に、義務から解放されるといふことではなく、積極的に自分の好きなことに取り組むということである。自己の気に入る世界を創造しようとするのである。我々

が、自ら進んで何かをやろうとする時、直面する困難や抵抗は我々の障害にはならない。むしろ、我々は、そうした困難に立ち向かうことに喜びを感じるのである。ニーチェは、次のように言っている。

《——「天にもとどく歓喜の叫び」をあげようと望む者は、また「死ぬばかりの悲しみ」をも覚悟しなければならぬとしたら、どうか？
おそらくそうしたものだ！》^①

それ故、遊びとは、或る意味で、闘いである、——勝負であり、賭け事である。ここで、本当の喜びを得ようとすれば、我々は相応の努力をしなければならぬだろう。自己を賭けて、真剣に努力することで、我々は本当の喜びを手にすることが出来る。否、そういう真剣さと厳しさのないところでは、本当の喜びはあり得ない。軽さと厳しさ、軽さと真剣さ、これらが同居しているところに、真の遊びがあるのだろう。

真剣さと厳しさのないところで、微温的に身体を寄せ合い、社会通念と、既成道德の枠の中で、何の冒険もしない生き方をする多くの人々、——ニーチェは、彼等を家畜の群れと呼んでいる。また、彼が、末人 (*der letzte Mensch*) と呼び、また皮肉をこめて善人、或いは美しい魂と呼んでいるのは、そのような微温的な生き方をする人々である。彼等の求めている幸福は、結局、何もしいないということ——何の波風も立てずに、ただ、世の常識と慣習に従い、平穩無事であることだけを願っていることなのである。ニーチェは、早くから、このような生き方に対して疑問を投げかけていた。彼は、「教育者としてのショウペンハウワー」の冒頭で既に次のように書いている。

《人間は慣習と臆見のもとに身を隠す。畢竟するところどの人間も、自分がただ一度、ユニークなものとして、この世に存在していること、どんなに稀有の偶然をもってしても、こんなにも奇妙に多彩な多種なものを自分が現にそれである一なるものにまともて注ぎ入れることは二度とはないであろうことをよく知っている。なるほどそれを知ってはいるが、しかし良心の苛責のごとくに隠している。——なぜか？
因襲を必要とし、因襲をもって自分自身を覆い隠す隣人に対する恐怖からである。しかし、隣人を恐怖し、畜群のごとくに考え行為し、自己自身を享受しないように個人を強いるものは何であるか？ 若干の稀有な人々にあつてはおそらく羞恥であろう。大部分の人々にあつては便宜、不精、要するにあの旅行者の語った怠惰への性癖である。》^②

ここで、怠惰といわれているものは、後には、臆病と言われるであろう。自己に忠実に生きることとは、思っているほど簡単なことではない。何故ならば、隣人達がそのような生き方を容易に許さないからである。

《隣人に対する恐怖》という言葉が使われている。隣人達に対する気くばりと配慮を優先することによって、人は自分自身を見失ってしまうのだ。しかし、そのように無事と安全だけを願って生きていても、時間はやはり過ぎていく。そして、遂には、誰にも等しく訪れる死の瞬間がやってくるのである。その時、我々は「これが人生なのか、よし、もう一度！」と言えるだろうか？ 自分の人生を何度も繰り返して希求することが出来るだろうか？

自分自身が、与えられた各瞬間に納得のいく生き方をしているのなら、「よし、もう一度！」と言えるであろう。しかし、自分自身の欲求を殺し、隣人や他者への配慮だけで、生きていく人にそう言えるであろうか？ ニーチェは、そこで、「よし、もう一度！」と言えるように生きよ、というのである。彼は言っている。

《大衆に属したくない人は自己に対して安易であることを止めさせよ。」「汝自身であれ！ 汝が今為し、考え、欲しているもの、それはすべて汝ではないぞ」、と呼び掛ける自己の良心に従うべきだ。③

ニーチェの永劫回帰の思想の中には、死と死を乗り越える概念が含まれているといえよう。何が、死を乗り越えさせるのか？ 一つには、快楽であろう。また、もう一つには、勇気である。彼は書いている。

《だが、わたしの中には、わたしが勇気と呼ぶ何かが存在している。それがこれまでわたしの意気沈滞を打ち殺した。——（中略）——

だが、勇気は、攻撃する勇気は、もっともよく打ち殺すものである。勇気は死をも打ち殺す。すなわち勇気はこう言うのである。「これが人生であったのか。よし！ もう一度！」と。④

この「これが人生であったのか。よし！ もう一度！」という言葉は、永劫回帰を肯定したときに発せられる言葉であろう。勇気が、この言葉を書かせたと、ニーチェは書いている。「幻影となぞについて」の章の終わり、羊飼いのどにへびがはいこむエピソードが書かれている。《わたしの手はへびをぐいぐい引っぱった。——だが、むなしかった！ わたしの手はへびをのどから引き出すことができなかった。その時わたしの中から叫ぶものがあつた。「かみつけ！ かみつけ！」

「頭をかみきれ！ かみつけ！」と——わたしの中からさげぶものがあつた。わたしの恐怖、憎悪、嘔吐感、あわれみ、一切の善と悪が、声一つにしてわたしの中からさげんだ。——（中略）——

——わたしの叫びがすめたように、羊飼いはかんだ。したたかにかんだ！へビの頭を遠くに吐きすてた。——そしてとびあがった

もはや羊飼いで人間でもなく——変化した者、光にとりかこまれた者で、彼は笑った！彼が笑ったように、ひとりの人間が笑ったことは、地上においてかつてなかった！^⑤

この喉のはいこんだへビをかみ切るのが、勇気である。

さて、死というものは、生あるものに何時かはやってくる。ただ、人間だけが、それが確実にやってくるということを知っているだけである。ここに、人間の実存の条件が存在する。即ち、我々は、自己の将来の確実な死を知っているが故に、その死を意味付けようとする。つまり、そうしなければ、我々は自己の生存の意味も納得出来なくなってしまうのである。多くの思想は、この生と死の意味付けのために考え出されたと言ってもよいだろう。永劫回帰の思想もこの死を乗り越える試みなのである。

死は、我々にとって、二重の意味を持っている。先にも書いたように、我々が、生きたくなければ、死ねばいいのである。もし、死ねないのであれば、我々は、懸命に生きるべきである。ところが、こうして、懸命に生きようとする人にも、死は刻一刻と、確実に近づいてくる。数学的な確実性をもって近づいてくるのだ。この近づいてくる死をどのように受けとればよいのだろうか？

死は、ある意味で人間のあらゆる行為を浄化するものだといえよう。つまり、死は、我々人間のあまりにも人間的なものを、洗い去り、無化してしまう。「自然」が、我々に無関心であるように、死も人間のあまりにも人間的な思惑には一切無関心である。人間が、どんなに嫌だと泣き叫ぼうと、どんなに哀願しようも、そんなものには一切無関心に、死はやってくる。人間的な世界で、どんなにおごり高ぶっていようと、どんなに権勢を誇っているかと、死は避けることが出来ない。死はいわば自然の鉄槌である。死の前では、人間はあらゆる人間的なものをはぎとられて、一個の生物として、一個の自然として自己に向かい合わざるを得ない。その時、我々は、すがすがしい気持で、笑ってこれを受け入れることが出来るだろうか？それとも……？このことは、我々の普段の生き方にかかっている。

多くの人間は、その日常生活において、この「死」を忘れてしまっている。我々が、一刻一刻死にむかって進んでいる「死すべき存在」であることを忘れてしまっている。そしてその忘却の中で、人間的な、あまりにも人間的な世界だけに目をうばわれてしまっている。

その我々が、自然なあり方、本来的なあり方に戻ろうとするならば、我々はこの「死」を忘れてはならないであろう。瞬間、瞬間の経過が、瞬間、瞬間の死につながっていることを自覚しなければならぬであろう。

メモント・モリ (memento mori) 「死を忘れるな!」。永劫回帰の思想は、この死を常に自覚し、それを乗り越えようとする思想である。と言うのは、瞬間を永遠だと考える思想は、既に「死」をその前提として受け入れているからである。死を受け入れているからこそ、我々は、瞬間を尊いものとして扱うことが出来るのだ。この瞬間を逃してはならないものとして永遠に志向することが出来るのだ。

ところが、多くの人々は、通常このことを忘れてしまっている。彼等は、あたかも死が存在しないかのように振る舞う。それどころか、彼等は死後の世界という幻想を考え出し、それによってこの現世の価値を落しめようとするのである。瞬間の価値を落しめようとするのである。

これらの背後世界を考え出したのは、この現実の生に疲れ、現実の世界に敵意と恨みをもった人間である。彼等は、この現実から逃れようとして、このような作り話をこしらえたのである。ニーチェが、生涯の後半において、最も力を注いだのは、このような背後世界を考え出して、我々の生を落しめる考え方である。

永劫回帰の思想は、これらの背後世界の世界観とは反対に、徹底的に現世的な思想である。それは、キリスト教や他の宗教という死後の世界とか、あの世、天国と地獄などという所謂背後世界を認めない。死ねば終わりである。いや、死んでもまた同じ人生が再び戻ってくるのである。何度でも同じ人生が戻ってくるのである。我々は、いま与えられているこの人生を絶対に逃れることは出来ないのである。いま与えられている人生を肯定して、明るく、陽気に生きていくより他はないのである。永劫回帰を肯定する生き方とは、それ故運命愛 (amor fati) の考え方になるだろう。ニーチェは言っている。

《人間における偉大さをあらわすわたしの方式は運命愛である。まえに向かっても、うしろに向かっても、全永遠にわたって、何ひとつ違つたふうには持とうとは欲しないことである。必然的なものを単にたえしのぶだけでなく、まして包みかくすのでなく——あらゆる理想主義は必然的なものに対して嘘でっちあげたものだ——、これを愛すること。……》⁶⁾

ニーチェのいう精神の三つの変化の最後の「子供」というのは、このような運命愛を体現しながら、明るく、無邪気に、遊んでいる姿なのであろう。

さて、以上に我々は、ニーチェの「ツアラツストラ」における中心的な思想を考察してきたわけであるが、振り返って考えてみると、ニーチェの思想は、彼の処女作「悲劇の誕生」で、ほぼその骨格が出来上っていたと言っている。ただ、ニーチェ自身が、自分で自分自身の考えの独特なところに気付いていなかっただけである。彼は、当時、自己の思想をショウペンハウワーの思想と結びつけて考えていた。しかし、結局、両者の考えは根本的なところで異なっていた。ニーチェの生涯は、その違いに次第に気付き、遂には彼独自の哲学に目醒めるといふ過程であったと言えるだろう。

さて、その「悲劇の誕生」において、ニーチェは、既にディオニソス的なものというニーチェ独特の概念をもっている。この概念は、「力への意志」という概念に発展するものだが、ニーチェに言わすれば、悲劇の根源はこのディオニソス的なものである。

悲劇は、絵画的要素と音楽的要素の二つから出来ているが、悲劇は、その発生から言うと、劇の背後で歌われている合唱隊の歌声（コロス）から作られた。そして、その歌声は、春の訪れと共に繰り返し返される狂気乱舞の祭典にその根柢を持っているという。即ち、ニーチェによれば、音楽は、この自然や生命を動かしている根源の一者と合体するところに生まれるのであって、音楽は、生の意志を発揚し、前進させる陶酔にその本質を持っているのである。

そもそも、この自然、生命をつき動かしているのは、「一つの意志」である。——それを、ニーチェはディオニソス的なものと呼んでいる。それは、個々ばらばらに分断されて存在する生命の根源にあって、それらを動かす力であるが、この根源の一者は、より強くなり、より大きくならうとする意欲、意志——力への意志である。春の訪れと共に、この根源の一者の衝動を身の内に感じたものが、その歓喜の声を上げ、狂気乱舞し、我を忘れて歌い上げる生の賛歌が、音楽の起源なのである。

そして、ギリシャ悲劇はこのディオニソス的な音楽を母胎にしているのである。我々はこの音楽を聞き、またこの音楽を母胎として生まれた悲劇を見ることによって、宇宙の根源の一者との合一の体験を迫体験することが出来る。そしてそれによって、生命力が高められ、力への意志が

高揚されて、より強く生きていこうとする力を得るのである。

《何に対してわれわれは感謝すべきか。——ひとのおの何者であり、何を体験し、何を欲しているかを、そこばくの楽しみをもって見たり聞いたりする眼と耳とをば、はじめてひとびとに与えてくれたのは、芸術家それも特に劇芸術家であった。彼らがはじめて、われわれに、だれかれともないこれら日常人のひとりびとりにの中に隠されている主人公の尊重すべきを教えてくれたし、また、どうすればわれわれが主人公としての自分自身を、遠方から、いわば単純化した明るく高められたすがたにおいて、眺められるようになるかという術を教えてくれた、——つまり自分自身の見物するところで自分を「舞台上に上せる」ところの術を。こうしてのみ、われわれは、われわれの身にあるそこばくの低劣なデテールを無視することができる！

あの術をもたないなら、われわれは、前景以外の何もでもないだらうし、至って身近の卑俗なものをば恐ろしく巨大なもの・現実そのもののように見させるあの光学の魔力に魅せられたままで生きるよりほかないであろう。——ひとりびとりの人間の罪性を拡大鏡で眺めるように命じ、この罪人をば大きな永遠の犯罪人に仕上げてしまうあの宗教にも、恐らくあの術と似たような種類の功德があるのかも知れない。それというのも、その宗教が人間を包む永遠の遠近法を描いてやることによって、人間が自分自身を遠方から、或る過ぎ去れるもの、完了した存在として眺めることを教えたからである。》¹⁾

この世には、二つのものがある。一つは、我々の生命力を高めてくれるものである。即ち、芸術であり、スポーツであり、闘いであり、競技である。もう一つは、逆に、我々の生命力を弱めるものである。即ち、ソクラテス主義であり、キリスト教であり、道徳である。或いは、所謂科学的世界観などもニーチェによれば、同様に、我々の生命力を弱めるものと見なされよう。

これらの様々な思想や考え方は、ニーチェに言わすれば、我々のもつパースペクティヴである。それらは、我々が生きるために持たざるをえない遠近法にすぎない。

我々は、生きるためには、何らかの図式を持たなければならない。その図式によって、自分なりの判断を下し、行動するのである。今まで、我々にこの図式を提供してきたのは、哲学、宗教、道徳、習慣、科学、芸術などである。これらによって提供された図式に自己の体験を噛み合わせ、我々は自分の世界観を作っているのだ。

ところで、これらすべての図式は、ニーチェに言わすれば、我々が生きていくために持たざるを得ない「誤謬」なのである。真理なんて探しても何処にも存在しない。我々のもっている観念、思想、世界観、自然観、……、こんなものは全て「誤謬」なのである。それが、真であることは決して証明されることはない。

だから、我々の持たざるを得ない「誤謬」の価値は、それが我々に与えてくれる効果に依っている。即ち、それが我々の生命力を高めてくれれば、良いものであり、逆に、生命力を弱め、低下させるようなものであれば、良くないのである。ニーチェは、この遠近法主義をうまく使用する事によって、人生を陽気に生きていこうとするのである。

哲学も、音楽も、文学も、スポーツもすべて、我々に感動を与えるものの中にはドラマが存在する。ドラマとは何か？ それは、そこに人生の縮図が単純化された形で表現されていると言うことである。問題状況（危機、困難、苦痛、災害、病気……）とそれを解決するための努力とその結果が、単純化された形で現わされていること——それが、ドラマである。このドラマを見ることによって、我々は、感動を覚え、救われ、生きる勇気を与えられるのである。

ドラマとは、我々が、人生の途上で出会わざるを得ない人間的な悲喜劇を、拡大鏡で見せてくれるものである。そして、そのことによって我々の中に眠っているヒーローを目醒めさせ、我々をより高次な生へと鼓舞してくれるのである。それ故、劇芸術は、生への刺激剤であり、ともすれば眠りこみ、安呑で無事な道を取りたがる我々に、より険しい道を行く勇気を与えてくれるものである。

このように考えると、構造主義の主張はよく理解出来るだろう。我々、人間の生活は、何処を取り出しても、どの瞬間を取り出しても、そこに同じ構造を見いだすことが出来るのだ。即ち、自己克服を目指す人間が遭遇せざるを得ない状況とそれとの格闘の様が見いだされるのである。

このことを理解すれば、我々は、人生の至る所にドラマを見いだし、至る所にヒーローを発見し、それらに支えられて、我々自身も新たな創造への道へと挑戦することが出来るだろう。

芸術は、これらのドラマを最も分かり易い形で、我々に提供してくれ、その意味で我々に人生を教えてくれるものである。

〔註〕

第1章

- 1 「ツアラッストラかく語りき」の第一部の「読むことと書くことについて」
右に同じ
- 2 右に同じ
- 3 「この人を見よ」の序言の4
- 4 右に同じ
- 5 右に同じ

第2章

- 1 「ツアラッストラ」の第一部の「三つの変化について」
- 2 「この人を見よ」の「なぜわたしはこんなによい本を書くのか」の「人間的なあまりに人間的な」の2
右に同じの3
- 3 右に同じの3
- 4 「この人を見よ」の「なぜわたしはこんなに悟っているのか」の1
- 5 「ツアラッストラ」の第一部の「あたえる徳について」の3
- 6 註2に同じの1
- 7 右に同じの4
- 8 「ツアラッストラ」の第一部の「三つの変化について」

第3章

- 1 「ツアラッストラ」の序言の3
- 2 右に同じ
- 3 右に同じ
- 4 「悦ばしき知識」の第三書の125
右に同じ
- 5 右に同じ
- 6 「悦ばしき知識」の序文の4
- 7 「ツアラッストラ」の第四部の「もっとも醜い人間」
右に同じ
- 8 右に同じ

永劫回帰と瞬間

永劫回帰と瞬間

第4章

- 1 「ツアラツストラ」の第四部の「より高い人間について」の17
- 2 「ツアラツストラ」の第一部の「隣人愛について」
- 3 「悦ばしき知識」の「たわむれたばかり意趣ばらし」の63の「星のモラル」
- 4 「ツアラツストラ」の第二部の「同情者たちについて」
- 5 右に同じ
- 6 「ツアラツストラ」の第三部の「幻影となぞについて」
- 7 註4に同じ
- 8 「ツアラツストラ」の第四部の「より高い人間について」の15
- 9 註3に同じ

第5章

- 1 「ツアラツストラ」の第一部の「肉体のけいべつ者について」
- 2 右に同じ
- 3 「ツアラツストラ」の第二部の「自己克服について」
- 4 右に同じ
- 5 「ツアラツストラ」の第三部の「古い板と新しい板について」の26
- 6 「ツアラツストラ」の第一部の「隣人愛について」

第6章

- 1 「ツアラツストラ」の第三部の「快方に向かう人」の1
- 2 右に同じの2
- 3 右に同じ
- 4 右に同じ
- 5 右に同じ
- 6 「悦ばしき知識」の第一書の26
- 7 註5に同じ

- 8 「ツアラツストラ」の第二部の「幸福の島について」
- 9 「ツアラツストラ」第二部の「救いについて」
- 10 M. Heidegger : Nietzsche, 2Bde., (Neske 1961)

第7章

- 1 「ツアラツストラ」の第三部の「幻影となぞについて」の1
- 2 「ツアラツストラ」の第三部の「もう一つの踊りの歌」の3
- 3 「ツアラツストラ」の第三部の「日の出まへ」
- 4 「ツアラツストラ」第三部の「七つの封印（あるいは『然り』と『アーメン』の歌）」
- 5 「ツアラツストラ」の第二部の「崇高な者たちについて」
- 6 「ツアラツストラ」の第四部の「より高い人間について」の18

第8章

- 1 「悦ばしき知識の」第一書の12、「学問の目標について」
- 2 「反時代的考察」の「教育者としてのショウペンハウワー」の1
- 3 右に同じ
- 4 「ツアラツストラ」の第三部の「幻影となぞについて」の1
- 5 右に同じの2
- 6 「この人を見よ」の「なぜわたしはこんなに利口なのか」の10

第9章

- 1 「悦ばしき知識」の第二書の78、「何に對してわれわれは感謝すべきか」

追記 訳文については、「ツアラツストラかく語りき」と「この人を見よ」は、河出書房新社「世界の大思想25」の高橋健二、秋山英夫訳を、その他の著作については、理想社刊「ニーチェ全集」の訳によった。訳者の方々に、感謝したい。